

# 次期学習指導要領におけるアクティブ・ラーニングの あり方に関する研究

## 一言語活動の実態調査と分析を中心に

いわもとちかのり  
岩本親憲

すがやまさみ  
菅谷正美

### 〈要 旨〉

次期学習指導要領においては、小中高のどの学校種においてもアクティブ・ラーニングが必要とされる。

それを見越して、現行の学習指導要領のキーポイントであった言語活動が小学校の各教科指導において実施されているのかの実態調査と分析をもとに、今後のアクティブ・ラーニングのあり方を探った。

### 〈キーワード〉

アクティブ・ラーニング, 言語活動, 学習指導要領, 教育課程

## I. はじめに

### 1. 次期学習指導要領の改訂とアクティブ・ラーニング

近年、大学のみならず、初等中等教育においても、「アクティブ・ラーニング」(以下、AL)に対する関心が高まってきており、次期学習指導要領の改訂においても、ALへの注目が高まってきている。もともとALは、アメリカにおける大学教育における授業改善やファカルティ・ディベロップメントの文脈において、注目されてきたものである。日本においては、2012年8月の中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)」に端を発し、まずは大学においてALへの関心が高まった。その後、2014年11月20日に文部科学大臣から中央教育審議会へ出された「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について(諮問)」を契機として、初等中等教育においてもALが注目され

てきている。初等中等教育における教育課程にALを導入する際の課題(細川・浦野, 2016)についても既に議論され始めており、今後ALへの注目が一層高まっていくことが推測される。

また2018年4月から小学校において実施されることとなった「特別の教科 道徳」においても、「発達段階に応じ、答えが一つではない道徳的な課題を一人一人の児童が自分自身の問題と捉え、向き合う「考える道徳」、「議論する道徳」へと転換を図るもの」であるとされており、道徳の授業改善においてもALの考え方が重要な意味をもってくることになる。(黒澤・齋藤,)さらに言えば、水上(2015)が道徳性の教育と世界的に関心が高まりつつあるシティズンシップ教育との関係性を考察しているように、今後道徳教育がシティズンシップ教育や政治的リテラシーの教育との関係から議論されていくと考えられる。その際に、ALは重要な基礎学力やキーコンピテンシーを育成する方法(教授・学習法)として、ますます注目されることになると考えられる。

## 2. アクティブ・ラーニングの意義

ALは、考えようによっては、何も目新しいものではない。教育学においては、デューイやキルパトリック等を引用するまでもなく、「子ども中心」のスローガンや、問題解決学習、コアカリキュラム等、同様の「子どもの主体的な学びを重視しよう」といった主張はしばしば目にするものである。また、日本においても、すでに現在の学習指導要領において「総合的な学習の時間」や「言語活動の充実」といった観点から、児童生徒の主体的な学習は強調されてきており、教育実践の現場においても同様である。とはいえ、近年注目されるALの導入は、教育方法・教授法の改善策としてだけでなく、教育課程(学習内容)の改革にも影響する、古くて新しい、教授学習観のパラダイム転換を引き起こす起爆剤となりうるものである。ALは、学ぶ側よりもむしろ教える側に学習観の転換を要求し、「教育の目標の再検討をもたらす学習活動のデザインと評価枠組みの再構築」(河野, 2016)を必要とする。

中央教育審議会の示した定義によると、ALとは、「教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。」(「用語集」p.37)とされる。この定義においては、ALは方法に焦点があてられ、学習形態を示す定義となっている。

一方、しばしば引用される溝上(2014)の定義によれば、ALとは「一方的な知識伝達型の講義を聴くという(受動的)学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学修のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表などの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う」(p.7)とされる。さらに、溝上(2014)は、「アクティブラーニング」概念と実際に行われる「アクティブラーニング型授業」を区別すべきことを指摘している。この定義においては、「知識伝達型講義」を乗り越

えて、学習者の「認知プロセスの外化」(知覚・記憶・言語・思考を、観察可能な表現にする)を促すものとするのが強調される。したがって、「アクティブラーニング型授業」においては、決して従前の講義形式がすべて否定されるものではなく、講義における学習が軽視されているわけではない。むしろ、講義(知識の伝達)がないまま、基礎知識なしに方法としてのみ、ALが取り入れられることは危険である。

いずれにせよ、ALの導入は学習観の転換のみならず、学校における教授方法、教授学習プロセス、教育評価、教育課程の編成等へ、多大な影響を及ぼし得るものになる。ALは教育方法としてだけでなく、カリキュラム編成全体に影響を与える、教育思想の転換でもある。すなわち、教育=教授(講義)という捉え方からの脱却を示している。溝上(2007)が指摘するように、知識習得とALの有機的な体系化をすすめつつ、AL「の質を内容(コンテンツ)という観点で高めていくときには、カリキュラムの再組織化が重要である」といえる。

### 3. アクティブ・ラーニングにおける学習活動の基盤

中央教育審議会の部会において、「言語活動の今後の方向性」として、「各教科等の教育目標を実現するため、見通しを立て、主体的に課題の発見・解決に取り組み、振り返るといった学習の過程において、言語活動を効果的に位置づけ、そのねらいを明確に示すことが必要である。アクティブ・ラーニングを構成する学習活動の要素を検討する際も、言語が学習活動の基盤となるものであることを踏まえた検討が必要である。」(中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会教育課程企画特別部会(第4回)配付資料。なお、原文から下線は削除した)とあるように、今後のALの導入に関わって、いわゆる現学習指導要領に謳われている「言語活動の充実」が、具体的に学校現場でどのように機能していくのか、注目していく必要がある。

そこで、道徳・総合的な学習時間、特別活動を一体化した、「市民科」を設置している東京都品川区教育委員会および校長会において、ALにおいても鍵となる「言語活動」の指導の現状について調査研究を行った。以下にみていきたい。

## Ⅱ. 品川区の小学校における「言語活動」の指導に関する調査

### 1. 調査目的

現行の学習指導要領の大きな特色は、読解力の育成を各学校段階および各教科に拡大して全教育活動において言語活動(単なる読解ではなく、思考力、判断力、表現力等を含む)全体の充実を図ることである。このことは学習指導要領に以下のように書かれている。

図 1. 現行学習指導要領の一部抜粋(\*下線部分は筆者による。)

## 小学校学習指導要領

### 第 1 章総則

#### 第 1 教育課程編成の一般方針

学校の教育活動を進めるに当たっては、各学校において、児童に生きる力をはぐくむことを目指し、創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する中で、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かす教育の充実に努めなければならない。

#### 第 4 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項

2 以上のほか、次の事項に配慮するものとする。

(1) 各教科等の指導に当たっては、児童の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに、言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、児童の言語活動を充実すること。

現行の学習指導要領の実施から 6 年経過し、2015 年夏には、次期学習指導要領は小学校では 2019 年度から実施するという予定が発表された。そこで、今の時期に学校現場では言語活動に関わる取り組みがどの程度行われているかの状況を教科の指導内容に応じて掴んでおくことは、今後の教育活動の指導改善に役立つ情報を得ることができると考えた。

また、言語活動については、2008 年の中央教育審議会の答申では、思考力・判断力・表現力等を育むために、以下のような活動を各教科等で行うことが不可欠であるとされた。この調査・研究では、言語活動を以下の内容であるとして進めている。

- (1) 体験から感じ取ったことを表現する
- (2) 事実を正確に理解し伝達する
- (3) 概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする
- (4) 情報を分析・評価し、論述する
- (5) 課題について、構想を立て実践し、評価・改善する
- (6) 互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる

そこで、品川区の学校では、それぞれの教師が各教科において言語活動に関わる具体的な指導がどの程度、また、どのように行われているのかを調査することとした。この調査は、品川区教育委員会と品川区校長会が行ったもので、その調査結果をもとにして、筆者が分析したものである。

調査ではアンケートの依頼等、品川区教育委員会と品川区小学校との連携で進めたものである。また、アンケート内容の分析結果については、品川区教育委員会及び品川区校長会に報告してある。加えて、本大学の紀要に掲載する許可を品川区教育委員会及び品川区校長会に戴いてある。

## 2. 調査内容

小学校の教員が各教科及び領域の中で言語活動のうちどのような具体的な指導を授業の中で行っているのか、具体的な言語活動について各学校の教員に回答をお願いした。アンケートの具体的な項目は、集計後の比較研究を考慮してアンケートの設問内容は、熊本県立教育センターによる調査研究(2010年実施)を参考にした。その理由は、教科ごとに具体的な言語活動が網羅(100項目に上る)されていることと、多くの調査資料(290校の回答)がそろっていることによる。また、品川区が他県と比較して道徳・総合的な学習時間、特別活動を一体化した市民科を実施していることから、教科として「市民科」を調査対象に加えてある。

## 3. 調査概要

○日 時 2015年6月から7月

○回答教科 国語(1・2年, 3・4年, 5・6年), 社会, 算数, 理科, 生活, 音楽, 図画工作, 体育, 家庭, 市民科

○対 象 品川区内の小学校教員

○回 答 数 学校数 23校

○回答者数 述べ278人

## 4. 回答結果

教科の指導に際して担当教員は、どのような言語活動を行っているかの回答結果は、以下の表1から表12のとおりである。(表には、回答教員の判断で、設問にある具体的な言語活動例について、A(十分実施), B(実施), C(やや不十分), D(実施なし)の回答数を記してある。

表 1 国語(1 学年・2 学年)

(話すこと・聞くこと)

	言語活動例	A	B	C	D
1	事物の説明や経験を報告したり, それを聞いて感想を述べたりすること。	7	17	2	1
2	知らせたいことなどについて身近な人に紹介したり, それを聞いたりすること。	6	18	2	1
3	尋ねたり応答したり, グループで話し合って考えを一つにまとめたりすること。	6	7	12	2
4	場面に合わせて挨拶をしたり, 必要なことについて身近な人と連絡し合ったりすること。	5	16	5	1

(書くこと)

	言語活動例	A	B	C	D
1	経験したことを報告する文章や観察したことを記録する文章などを書くこと。	11	13	2	1
2	紹介したいことをメモにまとめたり, 文章に書いたりすること。	5	15	5	2
3	身近な事物を簡単に説明する文章などを書いたりすること。	6	12	8	1
4	伝えたいことを簡単な手紙に書くこと。	6	8	9	4
5	想像したことなどを文章に書くこと。	3	10	12	2

(読むこと)

	言語活動例	A	B	C	D
1	本や文章を楽しんだり, 想像を広げたりしながら読むこと。	17	9	1	0
2	物語の読み聞かせを聞いたり, 物語を演じたりすること。	14	12	0	1
3	読んだ本について, 好きなところを紹介すること。	7	7	10	3
4	事物の仕組みなどについて説明した本や文章を読むこと。	6	13	7	1
5	物語や科学的なことについて書いた本や文章を読んで, 感想を書くこと。	6	11	7	3

小学校 1・2 学年の担任の教師による国語の指導の中での言語活動(話すこと・書くこと 4 項目, 書くこと 5 項目, 読むこと 5 項目)について回答がなされた。設問の中で, 全員の教師が行っていたことは, 「(読むこと) 本や文章を楽しんだり, 想像を広げたりしながら読むこと」, であった。また, 十分に行っていると回答が多いものは, 「(書くこと) 経験したことを報告する文章や観察したことを記録する文章などを書くこと」, であった。反対に, まだ不十分であることや行っていないとの回答は, 「(書くこと) 想像したことなどを文章に書くこと」, 「(書くこと) 伝えたいことを簡単な手紙に書くこと」であった。これらの回答では, 1・2 年生の発達段階と国語の学習内容との関係が考えられ, 現場ではまず読むことを重視して指導を行っていることが考えられる。よって, 書くことへの指導が十分でないと回答されていることで理解できる。

表 2 国語(3 学年・4 学年)

(話すこと・聞くこと)

	言語活動例	A	B	C	D
1	出来事の説明や調査の報告をしたり, それらを聞いて意見を述べたりすること。	7	18	2	0
2	学級全体で話し合って考えをまとめたり, 意見を述べ合ったりすること。	8	17	2	0
3	図表や絵, 写真などから読み取ったことを基に話し合ったり, 聞いたりすること。	3	18	4	2

(書くこと)

	言語活動例	A	B	C	D
1	疑問に思ったことを調べて, 報告する文章を書いたり, 学級新聞などに表したりすること。	5	14	7	1
2	目的に合わせて依頼状, 案内状, 礼状などの手紙を書くこと。	2	17	4	4
3	収集した資料を効果的に使い, 説明する文章などを書くこと。	5	16	4	2
4	身近なこと, 想像したことなどを基に, 詩をつくったり, 物語を書いたりすること。	3	14	4	6

(読むこと)

	言語活動例	A	B	C	D
1	物語や詩を読み, 感想を述べ合うこと。	12	15	0	0
2	記録や報告の文章, 図鑑や辞典などを読んで利用すること。	7	16	4	0
3	紹介したい本を取り上げて説明すること。	3	12	7	5
4	必要な情報を得るために, 読んだ内容を関連した他の本や文章などを読むこと。	1	15	9	2
5	記録や報告の文章を読んでまとめたものを読み合うこと。	3	16	5	3

3・4 年生の国語の指導では, 「(読むこと) 物語や詩を読み, 感想を述べ合うこと」, 「(話すこと・聞くこと) 学級全体で話し合って考えをまとめたり, 意見を述べ合ったりすること」, 「(同) 出来事の説明や調査の報告をしたり, それらを聞いて意見を述べたりすること」の 3 項目が良く行われている言語活動であった。3・4 年生の発達から, コミュニケーション力の向上が見られ, 学級の場面全体での言語活動ができるようになってきたことがわかる。しかし, 書くことでは, 「身近なこと, 想像したことなどを基に, 詩をつくったり, 物語を書いたりすること」や「目的に合わせて依頼状, 案内状, 礼状などの手紙を書くこと」など目的をもった書き方への指導がまだ十分でない, 現場の教員は考えているようである。

表 3 国語(5 学年・6 学年)

(話すこと・聞くこと)

	言語活動例	A	B	C	D
1	資料を提示しながら説明や報告をしたり, それらを聞いて助言や提案をしたりすること。	5	20	2	2
2	調べたことやまとめたことについて, 討議などを行うこと。	5	22	2	0
3	事物や人物を推薦したり, それを聞いたりすること。	3	15	9	2

(書くこと)

	言語活動例	A	B	C	D
1	自分の課題について調べ, 意見を記述した文章や活動を報告した文章などを書いたり編集したりすること。	7	16	6	0
2	経験したこと, 想像したことなどを基に, 詩や短歌, 俳句をつくり, 物語や随筆などを書いたりすること。	7	17	3	2
3	事物のよさを多くの人に伝えるための文章を書くこと。	6	17	4	2

(読むこと)

	言語活動例	A	B	C	D
1	自分の課題を解決するために, 意見を述べた文章や解説の文章などを利用すること。	7	20	2	0
2	本を読んで推薦の文章などを利用すること。	10	14	3	2
3	伝記を読み, 自分の生き方について考えること。	5	11	6	7
4	編集の仕方や記事の書き方に注意して新聞を読むこと。	8	13	5	3

5・6 年生の国語では, 「(読むこと)自分の課題を解決するために, 意見を述べた文章や解説の文章などを利用すること」や「(話すこと・聞くこと)調べたことやまとめたことについて, 討議などを行うこと」は, すべての教師が行っていた。しかし, 「(読むこと)伝記を読み, 自分の生き方について考えること」が実践されていないと 7 名(29 名中), 24%の教師が回答している。国語の指導事項の中では, (読むこと)の実践が低いようである。内容として, 深く読んでその結果を反映させる活動ができていないと, 現場の教員は考えているようである。



表 4 社会(3 学年から 6 学年)

	言語活動例	A	B	C	D
1	学習事項をしっかり理解し、自分の考えをもつこと。	9	18	3	0
2	具体的な視点を持って、観察・調査や社会科見学を行うこと。	10	17	1	2
3	考えたことを自分の言葉でまとめ、話し合うことにより、お互いの考えを深めていくこと。	5	17	8	0
4	問題の発見から追求、解決に至る問題解決的な学習活動をする事。	7	14	8	1
5	観察・調査や資料活用などを通して、必要情報を入手し、違いや共通点をとらえ、的確に記録・報告すること。	4	20	6	0
6	情報を比較・関連付け、総合しながら自分の考えを構築すること。	3	14	13	0

社会科では、「学習事項をしっかり理解し、自分の考えをもつこと」と「具体的な視点を持って、観察・調査や社会科見学を行うこと」が多く行われていた。全体的に、言語活動の実践が広く行われている。しかし、「情報を比較・関連付け、総合しながら自分の考えを構築すること」は指導しているがまだまだ不十分であると考えている教師が 13 名(30 名中)、43%おり、社会科の指導での言語活動において、このことは、最も高度な内容であると、現場の教員は考えているようである。

表 5 算数(1 学年から 6 学年)

	言語活動例	A	B	C	D
1	図を書いたり具体物を動かしたりしながら説明をすること。	17	19	0	0
2	互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを高めていくこと。	12	22	2	0
3	予想したことがらや事実を説明すること。	6	24	6	0
4	ことがらが成り立つ理由を説明すること。	9	20	5	2
5	自ら試行錯誤をしてみたり、資料を収集したり観察したり、操作したり、実験したりすること。	4	19	10	3
6	自分の言葉でまとめを行うこと。	4	17	10	5
7	学習の成果をレポートなどにまとめること。	1	8	14	13

算数では、「図を書いたり具体物を動かしたりしながら説明をすること」、「互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを高めていくこと」が良く行われていた。どの教師も実施している言語活動である。しかし、「学習の成果をレポートなどにまとめること」の実施では、

13 名(36 名中)、36%が実施していないと答えている。また、この活動がまだ十分でないとしている教師が 14 名と、予想よりも多くいた。

表6 理科(3学年から6学年)

	言語活動例	A	B	C	D
1	課題解決に取り組むとき、あらかじめ予想や仮説を立て、それを記録し、発表すること。	13	12	4	0
2	観察、実験から得られたものを整理するときに、ペアやグループでの話し合いや説明を行い、記録し、発表すること。	7	16	6	0
3	観察、実験の結果に基づいて考察するときに、考えをクラス全体で練り上げ、考えをまとめ、記録し発表すること。	8	17	4	0
4	観察、実験の結果に基づいて考察するときに、実験のまとめの様式にそって記録し、考察し、発表すること。	5	22	2	0
5	観察、実験から得られたものを整理するときに、図表、グラフなどを使用して、記録したり発表すること。	4	19	5	1
6	授業や単元の終わりに、レポート作成やまとめる活動(〇〇新聞づくりや掲示物制作・広報紙など)をとおして考えをまとめ、発表すること。	3	10	9	7

理科では、「課題解決に取り組むとき、あらかじめ予想や仮説を立て、それを記録し、発表すること」、「観察、実験の結果に基づいて考察するときに、考えをクラス全体で練り上げ、考えをまとめ、記録し発表すること」や「観察、実験の結果に基づいて考察するときに、実験のまとめの様式にそって記録し、考察し、発表すること」は、すべての教師が実施している。しかし、「授業や単元の終わりに、レポート作成やまとめる活動(〇〇新聞づくりや掲示物制作・広報紙など)を通して考えをまとめ、発表すること」は、7名(29名中)、24%が実施していない。

表7 生活(1学年・2学年)

	言語活動例	A	B	C	D
1	活動や体験での気づきを、言葉や絵で表すこと。	18	8	0	0
2	活動や体験での気づきを、他の人と伝え合ったりすること。	5	19	2	0
3	活動や体験したことを振り返り、自分なりに整理したりすること。	5	13	7	1
4	自分たちの生活や地域の出来事などを、身近な人々と伝え合うこと。	3	8	12	3
5	自分の特徴や可能性に気づき、自分なりに考えること。	2	5	11	8
6	自分の特徴や可能性に気づき、他の人たちに伝えること。	1	7	10	8

生活では、「活動や体験での気づきを、言葉や絵で表すこと」が最も多く行われていた。しかし、「自分の特徴や可能性に気づき、自分なりに考えること」と「自分の特徴や可能性に気づき、他の人たちに伝えること」はそれぞれ実施が少なく、現場の教員には指導の上で困難な課題があるようである。

表 8 音楽(1 学年から 6 学年)

(歌唱)

	言語活動例	A	B	C	D
1	歌で表現したいイメージや工夫したことをグループなどで話し合うこと。	1	16	5	1
2	お互いの歌唱に対するアドバイスを言葉で伝えること。	4	16	3	0
3	歌唱にこめられた作詞者の思いを受け止め、どのように曲に生かしたいかを説明すること。	4	13	5	1
4	作曲者の思いを受け止め、どのような音楽的表現をするかを言葉で表現すること。	3	15	5	0

(器楽)

	言語活動例	A	B	C	D
1	お互いの演奏に対するアドバイスを言葉で伝えること。	5	16	2	0
2	楽器で表現したいイメージや工夫したいことをグループなどで話し合うこと。	4	13	4	2
3	演奏する楽器の特徴や奏法を言葉で説明すること。	1	16	5	1
4	作曲者の思いを受け止め、どのような音楽的表現をするかを言葉で表現すること。	2	10	11	0

(創作)

	言語活動例	A	B	C	D
1	作りたい曲のイメージや工夫したいことをグループで話し合うこと。	4	12	6	1
2	曲を練り上げるときに、音楽的な用語を活用すること。	3	12	8	0
3	出来上がった作品の創作意図を音楽的な言葉を活用しながら説明すること。	1	9	12	1

(鑑賞)

	言語活動例	A	B	C	D
1	感じ取ったことを根拠をもって言葉で表現すること。	6	16	1	0
2	曲の要素、作曲者の思いなどを感じ取って、それに対する自分の思いを言葉で表現する。	3	20	0	0
3	演奏する楽器の特徴や奏法を言葉で説明すること。	6	14	3	0

音楽は、歌唱や器楽・創作・鑑賞などの領域の指導の中で具体的な言語活動が行われていると回答した教師が多い。特に鑑賞について「感じたことを言葉で表現する」という言語活動は実施が 100%であった。しかし創作では、「作品の制作意図を音楽的な言葉で表現すること」は、まだ十分に行われていないようである。

表 9 図画工作(1 学年から 6 学年)

	言語活動例	A	B	C	D
1	自分の思いや工夫を振り返ったり、友達に説明したりすること。	4	15	4	0
2	よさや美しさを見いだしたり、学んだことや感じたことを共有化するために、友達の作品や美術作品を見て意見を交換すること。	2	17	4	0
3	見方や感じ方を広げるために、友達の作品や美術品を見て、意見を交換すること。	2	18	3	0
4	表したいイメージを明確にするために、簡単な文章を書いたり、スケッチを描いたりすること。	5	13	5	0
5	表現の構想を具体化するために、簡単な文章を書いたり、スケッチを描いたりすること。	5	13	5	0
6	学習での学びを総括するために、感想を書くこと。	3	13	5	2

図画工作では、どの言語活動の事例もほとんどが実施されている。

表 10 家庭科(5 学年・6 学年)

	言語活動例	A	B	C	D
1	体験したことを振り返ったり、話し合ったりすること。	5	18	0	0
2	食生活調べや話し合いなどの活動を通して、自分の食生活について、主体的に考えること。	5	18	0	0
3	体験から感じ取ったこと、気づいたことを考察、共有すること。(製作・実習後)	3	17	3	0
4	調理実習や献立作成で使用する食品の栄養や調理法、食文化などを話し合うこと。	5	17	1	0
5	家庭生活について情報を収集し、整理すること。	2	20	1	0
6	家庭での実践に際して、計画などをグループで発表し合ったり、実践後に結果を発表すること。	4	11	7	1
7	実践結果の発表に際して、言葉や図表を用いて、説明したりすること。	1	10	6	3

家庭科では、「体験したことを振り返ったり、話し合ったりすること」、「食生活調べや話し合いなどの活動を通して、自分の食生活について、主体的に考えること」などは、すべての教師が十分に実施していると回答している。また、教員が不十分であると感じているのは、「実践結果の発表に際して、言葉や図表を用いて、説明したりすること」であった。

表 11 体育(1 学年から 6 学年)

	言語活動例	A	B	C	D
1	友達のよさや頑張りを認め合うこと。	11	12	0	0
2	互いに言葉で教え合い、話し合うこと。	5	12	6	0
3	学習の振り返りを記述する学習シートなどを活用すること。	9	9	4	1
4	運動・技能のポイントが分かる資料などを活用すること。	8	10	4	1

体育では、アンケートで示された言語活動の例は、ほとんどすべての教師が実施しているようである。

表 12 市民科(1 学年から 6 学年)

	言語活動例	A	B	C	D
1	教科書の内容や登場人物の気持ちなどについて、話したり、発表したりすること。	8	13	1	0
2	登場人物の気持ちについて、ノートやワークシートに書くこと。	7	12	3	0
3	教科書や資料の内容、登場人物の気持ちや言動の意味を考えること。	7	13	2	0
4	市民科で教える資質や能力について、自分の経験を想起すること。	10	12	0	0
5	自分の立場や考えについて、書いたり、発表したりすること。	12	10	0	0
6	市民科の授業を通して学んだことについて、書いたり、発表したりすること。	13	9	0	0
7	授業の中で使われた資料(集計結果、画像、映像など)などから考えられることを発表すること。	7	13	2	0
8	授業の中で使われた資料(集計結果、画像、映像など)などから自分の経験を想起すること。	5	14	3	0
9	ゲストティチャーなどの経験談や説話などを聞くこと。	1	10	10	1
10	登場人物になって、役割演技をすること。	4	14	4	0
11	課題について、友達と話したり、班で話し合ったりすること。	8	13	1	0
12	自分の心の変化について、書いたり、発表したりすること。	7	13	2	0
13	自分の身につけたスキルを、生活の中で実践したりしてその結果を発表すること。	4	15	3	0
14	これからの、自分の生き方や、在り方について書いたり、発表したりすること。	4	14	4	0
15	自分の立場や考えを明らかにして討論すること。	4	10	7	1
16	体験活動の場面で、体験を通して感じたり、気づいたりしたことを言葉でまとめ、発表させること。	6	16	0	0
17	児童会の計画、運営について、意見をまとめたり、計画を立案したりする話し合い活動の指導を行っている。	5	8	6	3
18	体験活動の指導の際、活動のねらいや意義を十分に理解させ、調べたり、準備させたりして児童に意欲を持たせる指導を行っていること。	6	12	4	0

市民科では、18の具体的言語化事例のうち、実施していないとの回答のあったものは、3例だけである。「自分の特徴や可能性に気づき、他の人たちに伝えること」、「児童会の計画、運営について、意見をまとめたり、計画を立案したりする話し合い活動の指導を行っている」と「自分の立場や考えを明らかにして討論すること」である。全体を通して、市民科の指導の中では、言語活動を積極的に活用していることがうかがえる。最も十分に実践していると回答しているものは、「市民科の授業を通して学んだことについて、書いたり、発表したりすること」や「自分の立場や考えについて、書いたり、発表したりすること」、「市民科で教える資質や能力について、自分の経験を想起すること」であった。

## 5. 回答の分析

表13のとおり、品川区と熊本県の調査とで実施率を比較すると、各教科合計の具体的な言語活動(100項目)では、全体的に実施率は、品川区の方が高くなっている。なお、品川区では、のべ278人の教師の回答、熊本県では274校の回答である。教科別の実施率では、以下の表13のように、品川区の実践率が高い。また、品川区ではすべての教師が実践していると回答したものが、100項目中56項目に達している。熊本県と比較して、言語活動がどの教科の指導においても常に実施されていることが分かる。このことの原因は、熊本県と品川区での調査の時期が異なることの影響が大きいと思われる。それは、小学校の学習指導要領が公示されたのは、2008年の3月である。2011年4月より小学校で全面実施になっている。ここで比較した熊本県の調査は、2010年1月に行われていることから、学習指導要領の移行期である。よってどの学校でも、新しい学習指導要領の内容を汲み取り、教育内容を作り出す最中であったと推測される。2008年からの移行期の前から小中一貫教育要領に基づき、学習指導要領の特色である言語活動をそれぞれの学校が工夫し、充実させてきた結果であると思われる。

表13 品川区と熊本県での実施率の比較

教科と事例数	品川区実施率の範囲	熊本県実施率の範囲
国語 36	70～100%	55～99%
社会 6	90～100%	60～93%
算数 7	64～100%	16～98%
理科 6	76～100%	52～97%
生活 6	69～100%	58～100%
音楽 14	91～100%	23～97%
図画工作 6	91～100%	67～95%
家庭 7	85～100%	37～95%
体育 4	96～100%	77～98%
市民科・道徳 15	96～100%	68～100%
市民科・特活 3	87～100%	82～89%

次に、品川区の教師は、さまざまな言語活動の中で、どのような活動の実施率が低いのか、実施の少ないものから順にあげると表 14 のとおりとなる。

表 14 実施率の低い言語活動

教科	言語活動例	品川区実施率	熊本県実施率
算数	学習の成果をレポートなどにまとめること	64%	16%
生活	自分の特徴や可能性に気づき、自分なりに考えること	69%	61%
生活	自分の特徴や可能性に気づき、他の人たちに伝えること	69%	58%

実施率が低いものは、上の 3 つの例である。参考としてあげた熊本県よりは実施率が高いものの、3 分の 2 程度の教師が実施するにとどまっている。

2011 年度前後において、小学校現場の言語活動の指導について東京都教職員研修センター紀要第 10 集の「言語活動の充実について」の研究の冒頭に次のように書かれている。

「当時東京都が都内公立小学校 94 校における言語活動の課題を調査したところ、言語活動については 21%の小学校が「発表や話し合いの授業になりがち」と回答し、「言語活動」＝「話し合い活動」と捉えられており、表現活動に重点がおかれた指導がなされ、「言語活動」自体が目的になっているという課題があった。」となっている。

その後、東京都教育研修センターが 2010 年度に行った都内の教員 600 人への調査では、当時の教師が指導の課題であると答えたものは、表 15 のとおりであった。

表 15 2010 年度東京都教育研修センター(紀要 10 号より)

各教科	課題であると感じているもの	回答(%)
国語 (話すこと・聞くこと)	討議すること	38%
	友達の意見に対する助言や提案をすること	36%
	グループや学級で話し合うこと	28%
国語 (書くこと)	資料を用いて説明する文章を書くこと	37%
	漢字や語句、語彙の習得に関すること	33%
算数	数学的な表現・考えをまとめること	36%
理科	表やグラフに整理・考察を言語化し表現すること	34%
社会	考えたことをまとめ、伝え合うことにより互いの考えを深めていく	32%

上記の内容を、品川区の教師の実態と比較すると、国語で苦手な言語活動であると回答としていたことは、品川区の教師はすべて授業の中で実施されている。また、算数、理科でも課題とされているものでも品川区では、ほとんどの教師によって行われている。社会では、「考えたことを自分の言葉でまとめ、話し合うことによって、お互いの考えを深めていくこと」は 100%実施されている。

## 6. 調査のまとめ

アンケートの結果より、品川区の小学校の教師による具体的な言語活動は、それぞれの教師が学習指導要領の「言語活動の充実」の意味を的確に理解し、日々の各教科の授業に確実に取り入れていることが分かった。

品川区の小学校における言語活動の充実は、それぞれの教員が各教科研究会の中でも研究しており、その効果もある。しかし、品川区の「小中一貫教育要領」の国語において、「漢字ステージ100」を導入して、言語活動の基礎である語彙の習得に力を入れてきたことが、子どもの国語の能力を向上させるだけでなく、各教科においても、教師の指導の中で多様な言語活動が出来ることに寄与しているものと思われる。人は、まず言葉・語彙を習得し、それを使いこなすことでさまざまな言語活動が実施できるのである。

また、品川区では、10年間にわたり全校をあげて市民科の授業実践を行ってきている。市民科の授業の中では、「市民科で扱う内容や人物について話したり、発表したりする」「登場人物の気持ちについてノートやワークシートに書くこと」、「市民科で教える資質や能力について、自分の経験を想起すること」、「自分の立場や考えについて、書いたり、発表したりすること」、「市民科の授業を通して学んだことについて、書いたり、発表したりすること」など言語活動の全ての項目が100%実践されている。とりわけ言語活動の中で、自分の意見を明確にし、主体的な発表等の意見表現をさせる活動が市民科の授業の中で確実に指導されている。さらに、そのような言語活動を基にして、市民科の授業案を作ってきたことが、教師の言語活動の充実への意識につながっているものと考えている。

今後、各教科が求める思考力、判断力、表現力等の能力向上に向けて、どのような言語活動が効果的であるかを検証する必要がある。たとえば、国語科では言語活動の基本の読解についてこれまでの読み取るということに加えて、情報のインプット・アウトプットという観点から子どもの能力の発達や個性に応じた言語活動を生かした指導方法を作り上げる必要がある。また、その際、得た情報を自分で思考し判断し、それをもとに表現としてアウトプットすることから、インプットとアウトプットの間に「思考する」というプロセスを考える必要がある。思考の過程でどのようなことを指導すべきかなどを研究する必要があるだろう。



## 〈引用・参考文献〉

- 中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」(2012年8月)
- 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会教育課程企画特別部会(第4回)配付資料「資料6 「言語活動の充実に関する検証改善」の成果について」(2015年3月)
- 河野麻沙美(2016)「教員養成課程におけるアクティブラーニングの課題と展望—21世紀型の学びを創出する教師の育成に向けて—」上越教育大学研究紀要, 35, pp.43-55.
- 熊本県立教育センター(2010)「小学校各教科での「言語活動の充実」に係る調査研究 熊本県教育センター紀要VOL38, pp.176 - 183.
- 黒澤幸子・齋藤道子(2015)「『特別の教科 道徳』におけるアクティブ・ラーニングの探究」昭和女子大学現代教育研究所紀要, pp.37-47.
- 細川和仁・浦野弘(2016)「小中学校の教育課程へのアクティブ・ラーニング導入における課題」秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要, p.38.
- 溝上慎一(2007)「アクティブ・ラーニング導入の実践的課題」名古屋高等教育研究, 7, pp.269-287.
- 溝上慎一(2014)『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂
- 水上光春(2015)「シティズンシップの視点から見た道徳性の教育」京都教育大学教育実践紀要, 15, pp.43-51.
- 文部科学大臣「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について(諮問)」(2014年11月20日)
- 文部科学省(2008)「小学校学習指導要領」
- 文部科学省(2010)「言語活動の充実に関する指導事例集」小学校版
- 大須賀隆子(2016)「アクティブ・ラーニングを実践するための理論的背景：動機づけ理論・学習理論・認知心理学・学級集団理論・教育評価」帝京科学大学教職指導研究：帝京科学大学教職センター紀要1(1), pp.83-92.
- 品川区教育委員会(2010)「品川区小中一貫教育要領」
- 東京都教職員研修センター(2010)「言語活動の充実に関する研究」東京都教職員研修センター紀要第10集, pp.29～54.